

令和5年度 第2回 国産材の安定供給体制の構築に向けた 中部地区需給情報連絡協議会 議事録

- 1 日 時：令和6年1月24日（水）13:30～15:30
- 2 場 所：ウェブ会議（Zoom Meeting）
- 3 出席者：別紙のとおり
- 4 議事次第及び配付資料：別紙のとおり
- 5 概 要

(1) 冒頭挨拶

○中部地区需給情報連絡協議会 鈴木会長（株式会社東海木材相互市場 代表取締役会長）

本協議会の会長を務めさせていただいております鈴木でございます。

元日に発生いたしました能登半島地震により亡くなられた方々に哀悼の意を表し、御遺族と被災されました方々に心からお見舞いを申し上げます。そして、被災地の一日も早い復興をお祈り申し上げます。

それでは、協議会の開会に当たり一言御挨拶申し上げます。皆様には、日頃から本協議会の運営に、御理解、御協力をいただき誠にありがとうございます。

本日は令和5年度2回目の会合となります。林野庁並びに関係中央団体をはじめ各構成員の皆様方には、お忙しい中、御参加をいただきまして感謝申し上げます。

さて、依然として住宅着工は厳しい状況です。ウッドショックは落ち着いた感がありますが、ロシア、ウクライナ情勢による原油高、円安は続いており、市況はその影響を大きく受けております。12月に入り、海運大手のスエズ運河の運行見合わせにより、今後欧州材が不足する可能性も見えてきております。また、東京港の製品在庫は3か月連続で在庫減となっておりますが、総需要が減っていることもあり、今は様子見の状況が続いております。

新春の業界紙にこんなことが書かれておりました。「価格競争に囚われすぎて、我々は飯の種である木材や木質建材の価値を放棄してはいないだろうか」と。私も、かねてより同じ思いを抱いております。我が国の人工林資源は本格的な利用期を迎えつつあります。輸入材のリスクも顕在化しております。そのような中、いかに価格競争から抜け出して木材の価値を強く訴えられるのか、我が国の森林資源の持続的な利用を図りながら、国産材の安定的・持続的な供給体制をいかに構築していくのが重要となっております。

さらに、「伐って、使って、植えて、育てる」という資源の循環サイクルにおいて、全てが赤字にならないことが林業、木材産業の発展につながると思っております。この理想が達成されるように努力していくことが必要であります。

本日の協議会では、森林・林業・木材産業関係者が一丸となって取組を進めていけるよう、地区の最新の情報を共有していただければと思います。ここに御参集の皆様様の活発な議論を期待し、実りある会議となりますよう祈念を申し上げまして、開会の挨拶とさせていただきます。

(2) 議事

○信州大学農学部 植木 教授（以下、座長）

それでは、早速議事に入りたいと思う。前回の会議は令和5年5月に開催され、住宅需要の落ち込みの影響から、プレカット稼働率だとか製品の販売量が低位な状態にあり、製品価格にも影響を及ぼしている一方で、エネルギー等の生産コストが上昇するという状況で、対応に苦慮しているという報告があった。原木生産においては、下落傾向にある価格の動向を見つつ、伐採量を見極めていく状況といった報告もあった。引き続き、国産材活用の機運の高まりをどう生かしていくか、需要に関する情報共有や、関係者間での意見交換を進めることが非常に重要であると感じたところである。

今日は、まず議事1として、林野庁から需給動向等についての資料説明をいただく。その後、直近の需給の動向等について、皆様から情報共有や意見交換をしていただきたいと考えているので、よろしく願います。それでは、林野庁から説明をお願いしたい。

○林野庁 木材産業課 永島課長補佐

資料1～4、参考1～7、林野庁予算について説明。

○林野庁 木材産業課 松田係長

資料5 改正建築基準法の施行について説明。

○林野庁 木材利用課 有山監査官

資料6 改正クリーンウッド法の施行に向けての説明。

○林野庁 木材利用課 吉藤木材専門官

資料7 木質バイオマスのライフサイクルGHGの説明。

○植木座長

ただいま、資料1から順々に説明をいただいた。まず先に、資料5「改正建築基準法」から資料7「木質バイオマスのライフサイクル」までの3つの説明に対して、意見あるいは質問を承りたいと思う。如何か。この場では特にないようなので、また何かあれば林野庁のほうに尋ねていただければと思う。

それでは議事の2、木材需給の動向についての意見交換に入りたいと思う。こここのところの需給のポイントを申し上げますと、製品輸入量、これは2023年を通じて低位な状況が続いているが、需要とのバランスの関係もあって、東京港在庫は減少傾向から、直近は底を打ったような状況になってきているという報告がある。国内の新築着工数、これが前年同期比で減と、厳しい状況が続いている。

前回会議以降の価格については、原木価格は下落傾向から上昇した地域も一部見られるが、製品価格については底を打っていて、直近では強含みの局面のものも見られているようだ。そういう状況の中で、川下、川中、川上と、現在の木材の生産、流通、加工等々についてお聞きしたい。

まず川下のほうから行くが、建築やプレカット、紙パルプ、バイオマス関係だが、今の林野庁の説明も踏まえて、持ち家や分譲住宅、非住宅の受注状況や今後の見通し、それから、価格の転嫁状況、木材資材の需要変化、国産材の活用拡大の事例等々があれば、情報提供をお願いしたいと思っている。

それではプレカットとして、ファーストウッド購買部の勝又さん、状況が徐々によくなってきているという話も聞いているが、そういったところも含めてよろしく願います。

○ファーストウッド株式会社 勝又購買部次長

私ども、飯田グループ向けの資材を扱っているが、国内の戸建住宅需要は、依然、低迷。完成住宅在庫がなかなか売れないという状況になっている。これは全国新設住宅着工が前年に比べて大分下回っているのと同じような推移で、実際、年間4万2,000から4万3,000棟の分譲住宅を造って販売しているが、完成住宅が6月末で7,500棟、これが9月には8,500棟を超えて、12月末は、この在庫がまだ減っていないということで、3月の期末に向けて、とにかく在庫の圧縮をせよということで、今、苦戦状況にある。

これだけ木材需要が減退しているので、業界の中では、例えば、合板なんかは、じりじり価格が下がっている状況ではある。一方で大手の中国木材さんの火事があったことで代替需要が発生している。そして、ヨーロッパ材については、紅海迂回での問題もある、円安も進行しているということで、輸入材については値上げの状況になっている。

我々が作っている集成材についても値上げの方向だが、今年度の住宅着工は、なかなか厳しい予測を立てており、その住宅需要次第で、木材価格が上がっていくのかという疑問がある。

○植木座長

なかなか厳しい状況であるということ間違いのないようだ。輸入材や集成材の値上げということも、その中には含まれてきているということで。

続いて、富山県木材組合連合会の清水さん、富山県内の状況について教えてほしいのだが。

○富山県木材組合連合会 清水副会長・専務理事

今、話があったとおり、富山県の場合も同様で、住宅の新設着工戸数は、2020年のコロナのときで5,253戸。令和5年の数字がそこに達するかどうかというところ。9月の数字では、対前年同月比で3割ほど落ちているという状況で、大変厳しい状況である。

そのような中、能登半島地震が起こり、県内5社ほど被害が出て、明るい状況は全く見えない。団体としては、いろんな方面、国や県、市町村も含めて要望活動を展開し、少しでも民間建築物への木材利用を進めていただくようお願いをしている状況である。

○植木座長

住宅着工数の落ち込みがまだ続いてという厳しい状況は依然として変わらない。そんな中で、元日の大震災があつて、これによって大きな影響も受けているという状況である。亡くなられた方々にはお悔やみを心から申し上げるとともに、一刻も早い復興を願っている。

このたびは大変な地震で、まだ影響が続いているということだと思うが、木材の伐採から製材、出荷等が、多分止まっているか、制限されている状況もあろうかと思う。

石川県木材産業振興協会の太田さん、そういった状況も含めて、現状と今後の生産活動の展望も含めて説明していただけたらありがたいが、如何か。

○公益社団法人石川県木材産業振興協会 太田副理事長

今回の震災は、ほとんど能登が中心だったため、加賀方面の製材所なり建築業者は、そんなに大きな被害というのではなく、もう既に活動していると思う。住宅業界の景況は、皆さんと同じで、あまり上向いておらず、プレカットも、去年度から見れば、かなり低迷した状態である。

能登地震の状況は、現在、いろいろ調べているが、状況が必ずしも全部把握できておらず、倒壊した製材所もある。今まで、能登地域からは、かなり多くの丸太が供給されていることから、これからそれらがどういうふうになってくるかというのは、まだちょっとつかめない状態である。これから春に向けて、能登の復興は皆さんの援助によって回復していくものと期待しているところである。

○植木座長

今後、復興の資材とかが、多分、重要になると思うが、その辺が供給の点で間に合うかどうか。これについては、皆さんからは是非協力をいただきたいと思っている。

○公益社団法人石川県木材産業振興協会 太田副理事長

よろしくお願ひしたい。

○植木座長

それでは、紙パルプ関係で大王製紙に伺いたい。池内さん、紙パルプ産業について、どのような現状であるか、今後の見通しも含めて発言いただければと思う。

○大王製紙株式会社 池内資源購買本部係長

紙パルプの現在の状況だが、全国の製紙会社の統計で行くと、対前年同月比では、少しマイナスが続いているのもあるが、今まで海外に輸出していたダンボール辺りが少し減っていることが影響している。これが為替の要因なのか、相手国の要因なのかは不明。輸出が少し悪いというのがあるが、国内の販売については大きく変わっていない。

今後の見通しとしては、日本に来る海外からの観光客が増えており、お土産等で、紙、お菓子の箱などの需要が見込まれる。弊社は、エリエール商品というブランドを持っており、家庭紙のトイレット、ティッシュ、キッチンペーパーについては、海外の観光客の方がホテルを使われて使用量が増えていくかなど。また、脱プラスチックに関して、紙のスプーンやフォークといった新たな事業分野での需要も見込まれているので、全体としては、輸出の影響はあるが、今後、高まる予想は持っている。

あと、製材所などの製材、廃材チップを頂いているが、少し低調なところがあり、その分、丸太製作のチップで何とか盛り返したいと思っている。

FIT 制度のボイラーが増えているので、この影響がじわじわ出てきている。冒頭林野庁から、ライフサイクル GHG の話があったが、これが新しいボイラーだけ適用ということになれば、この辺りの影響があるのではないかと懸念している。

○植木座長

最近、FIT 制度によるバイオマスエネルギーとの原木の競合で、パルプ会社も結構大変と聞いている

が、C材・D材に関する製紙会社の状況というのは、どんな感じか。やはり競合というのは、まだまだ今後も予想されるのか。

○大王製紙株式会社 池内資源購買本部係長

まだ、競合が出てくる。輸出向けも少し値段が高いところにあるので、ボイラーと輸出向け、この辺りにちょっと影響がある。

○植木座長

そうすると、原木の仕入れ量は間に合っていない状況と見てもいいか。

○大王製紙株式会社 池内資源購買本部係長

生産を維持しないといけないので、エリアを広げるなど努力をして何とか賄っているが、足元の近くで苦戦し始めているというところ。

○植木座長

そういうことだね。大王製紙さんから紙パルプ関係の状況について伺った。

それでは、愛知県木材組合連合会の西垣さん、如何か。

○一般社団法人愛知県木材組合連合会 西垣会長

2024年に入って名古屋地区で、いろいろな話を聞いていると、このところの状況はツーバイフォー、在来共々、需要が物凄く減っている状況である。これは続くであろうと、厳しくなる覚悟をしなければいけないと思っている。2023年度の新築着工数は、81.5万戸、いずれ70万戸代に入るのではと思っている。海外の状況からいくと、特に愛知の地区のツーバイフォー工場は、もうほとんど赤字に入ったんじゃないかなという状況で、今後、厳しさが増すと思われる。

材料に関しては、6割近くが外材である。スエズ運河の航行見合わせもあり、4月以降、最低でも1㎡当たり4~5,000円はアップしてくるだろう。今の段階で、円安で米材も上がり切り、価格競争に入っているので、今後は国産材をいかにして活用して、どういう動きをするかということである。ただ、4月以降は、いろいろな建築資材が必ず値上がり、新築着工数の増加は見込めないまでも、原価割れが生じる状況に入ると思う。

○植木座長

ただいま、川下の関係から、いろいろとお話を伺ったところである。総じて状況はよろしくない。また、諸物価の値上がりがある中で、やはり住宅受注が減少しているが、大きいのかなということである。そんな中で、やはりプレカットも含めて、様々なところで厳しい状況が続いているし、今後の見通しは、アンケートによると苦しいという状況判断をされているところは多い。今、大変厳しい状況であるということは間違いないようだ。

それでは、川中の発言をいただきたいと思う。製材、合板、集成材、チップ等々から、原木の確保の状況、それから需要の変化に対する対応、今後の生産体制等々について伺えればと思っている。アンケ

ートを見ると、この製材、合板関係も大変厳しい。例えば、国産材の原木仕入れと販売は減少傾向にあり、価格も下がってきている、国産材の仕入れ量も減少してきていることに加えて、在庫量も減少傾向にあるという、大方、ほとんど下落あるいは減少という状況が、川中の製材、合板関係では見られている。

それでは、昭典木材の峰野さん、製材関係の状況をお聞かせいただければと思う。

○昭典木材株式会社 峰野代表取締役

弊社の状況であるが、去年の夏頃、一番製品の値段も安く、販売も少なかったため、売上げをつくるのに困っていた時期があった。その後、中国木材さんの火事の影響もあり、今まで販売していないところから、新たな商品の問い合わせがあったりして、今まで作っていないものを売ったりする中で、少しずつ販売量が回復していったという状況である。そのほか、プレカットした材料、戸建ての注文のプレカットした材料の小売り販売の売れ行きはあまりよくない。

やはり前年と比べると新築の数が少ないので、そちらの売上げは減っている。その分を、新たな量産品でカバーしているような状況である。弊社は、スギの構造材を作って販売しており、先ほど、建築基準法の改正で木材の強度が、今よりもさらに必要になってくるのではという話があったが、そういった中で、スギの構造材は、今後、どれぐらい必要とされるかという不安を、抱えている。

原木に関しては、今のところ、足りないということはなく、必要な量は確保できている。

○植木座長

今後、やはりスギの強度の問題、これが厳しくなるというところから、その辺の不安を抱えているということか。

○昭典木材株式会社 峰野代表取締役

そうである。

○植木座長

今までに比べて、大分強度を上げるような方向で来ているのか。

○昭典木材株式会社 峰野代表取締役

弊社のお客さんからは、スギの強度が、ヤング率が低いから樹種を変更したいという問合せはないが、今後、スギを構造材として使っていく上で、材寸を大きくするとか、いろいろアイデアを出していかないと、スギの構造材が、2階建ての場合は使いにくくなってしまわないかなという点である。

○植木座長

そういう不安を抱えているということだね。

○昭典木材株式会社 峰野代表取締役

そうである。

○植木座長

スギは、日本で昔から一般に使われている木であり、やはりスギを使わなければ国産材の自給率も高まらないので、この辺は林野庁も、スギの有効活用に向けて工夫していただければと思う。

それでは、片桐銘木工業の片桐さん、このところの状況、それから展望等々について、如何か。

○片桐銘木工業株式会社 片桐代表取締役

皆さんの話と同様に、私ども、新築の需要に対する商品であるため、やはり非常に苦戦をしている。数が減るだけじゃなくて、その中の需要変化もある。それから、ウッドショック後に原材料の価格が下がっていないため、更に電気代等のその他経費アップもあり、今後、どうやって企業維持をしていこうかと。そこに、人手不足、ベースアップの問題も絡んできており、新しい需要を見つけて乗り切っていこうと努力している最中である。

○植木座長

やはり厳しい状況が続いているという判断でよろしいか。

○片桐銘木工業株式会社 片桐代表取締役

そのとおりである。

○植木座長

今後、この状況は続くと見ておられるか。

○片桐銘木工業株式会社 片桐代表取締役

各資料が示すように、空家率も非常に高いものがあり、需要減は続くと思う。そこで店舗も含めたリフォーム、リニューアルの需要をどうつかむのか、それから、都市部での高級賃貸住宅・アパート・マンションの需要にどう商品を作り込んで応えていくかというような考え方もあると思う。

○植木座長

それでは、いくつか流通関係のほうからお尋ねしたいと思う。東信木材センター協同組合連合会の小相沢さん、状況をよろしくお願ひしたい。

○東信木材センター協同組合連合会 小相沢代表理事専務

今、非常に合板関係、減産しており、私どもカラマツが8割という中で、このあいだまでは必要な量を6,000 m³ぐらい持っていたが、現状では大分出てきている。値段は、量が多くなるに従い下がるといふ予想はしているが、今のところそんなに変動もなく、ある程度動いている。この後、値段が下がってしまうと、山側も伐採を抑えると思うので、復興のこともあり、ぜひ頑張ってください、値段をある程度維持していただければありがたい。現状は、一日トレーラーで15台ぐらい動いている。

○植木座長

なるほど。カラマツ中心で、山から材は出てきているということだね。

○東信木材センター協同組合連合会 小相沢代表理事専務

今は、出てきている。

○植木座長

ただ、送り先のほうの合板関係がどうかというところが、やはり気になるところ。本日は、合板関係の方がみえないので、その辺が聞けないのが残念である。

それでは、東海木材相互市場の小森さん、よろしくお願ひしたい。

○株式会社東海木材相互市場 小森大口市場長

弊社の現状だが、今年度、取扱量はマイナス10%となっている。その内容を言うと、ウッドショックからの反動で圧倒的に並材の減りが影響を与えている。昨年末から、ヒノキの並材に関しては、1,000円、2,000円上がって、そのまま維持している状況である。今、一番売りやすいものはというと、ヒノキの中目から40cmまでの役物取りの元木で、競りになって高値が出るものも多い。

今年度、特に、ヒノキの大径材、社寺仏閣関係はかなり苦戦しており、物件が、例年に比べて少ない状況である。ただ、ヒノキの大径材は、今、飲食店の改装とかホテル建て替えの関係で、カウンターへの利用が好調であり、長木のきれいなもの、板の幅広の無地が取れるようなものは、比較的 Need がある。ただ、大径材でも節がある構造材用ものは苦戦している。スギの大径材も、太くなれば太くなるほど苦戦しており、なかなか金額が出ないため、伐採経費がかかるため、以前よりも大径材を取り扱うリスクが高まっていることが今、一番懸念しているところである。

今、並材で1割以上減っているが、需給バランスが非常に取れている状況である。3月まではシーズンで時期がいいが、役物取りも含めて、時期が悪くなる4月以降は、なかなかちょっと厳しいのかなと思っている。

○植木座長

ヒノキについては、ある程度よさそうな流れにあるようだが、スギに関しては、大径材を含めて、いまいちという判断ということか。

○株式会社東海木材相互市場 小森大口市場長

かなり厳しい。

○植木座長

なるほど。今後、様々な費用が値上がりしている中で、木材価格がなかなか上がらないという状況から、我々の業界というのは厳しい状況を迎えるだろうなという気がしている。

そんな中で、どのように対応すべきかが課題だと思う。特に流通関係の東海木材相互市場は、山から川下まで一貫してやられているので、何かこのところをポイントとして攻めるといいというアドバイ

スがあれば教えていただきたいが、如何か。

○株式会社東海木材相互市場 小森大口市場長

なかなか厳しい難しい質問である。とにかく材価を上げることを目指さないといけないと思う。やはりB材の利用よりもA材、特に、無垢材の利用、それから、役物の利用というのを増やして、材価自体の底上げをしていかないと、継続した山林経営、市場流通関係も、なかなか厳しいのかなと思っている。

○植木座長

なるほど。課題はたくさんあるが、なかなかその解決策が見出せないのがというのは現状かなと思う。東海林材の小杉さん、ここのところの状況、それから今後の見通しがあれば。

○株式会社東海林材 小杉取締役会長

初市が先日あったが、そのときに、設楽町の山で面積が確か1ha きれる0.7か0.8ha ぐらいの小面積皆伐をした。出材は非常にしやすく、材積が約300 m³あって、平均単価が1万2,500円だった。伐採費は、まだ計算できていないが、8,000円から1万円。仮に9,000円だとすると、1万2,500円から9,000円引いて3,500円。1ha 当たり400 m³とすると、3,500円かけて140万円となる。

伐採する場所がよくて、木が60年から65年ぐらいで1 m³当たり3,500円の手取りとなる。立木価格、いわゆる林家の方へ行く価格が、大体そんな見当となる。

皆伐をして、あとまた植林をしなければならぬので、そうすると、山を伐る人がいるのかなというのが現状である。先ほど小森さんが言われたとおり、材価を上げて林家の手取りを増やさない限り、国産材時代は、近くはなりつつあるけれども、まだ少し先かなというのが実感である。

○植木座長

なるほど。比較的、出しがよかったということで、何とか林家に還元できたということか。

○株式会社東海林材 小杉取締役会長

そういうことである。そんな良い山ばかりではないので、伐採費が1万円とかさらにかかっていると、山を伐っていくという元気はなくなってくる。

○植木座長

そのとおりである。この主伐で、ある程度儲けたところで、次のまた再生林を期待するわけだから、ここの収益が少なければ、やはりそういった再生林への気持ちも落ちてくるということになってくるわけだから。

○株式会社東海林材 小杉取締役会長

だから、今、樹齢の高い木も間伐となる傾向が強い。

○植木座長

長伐期に向けてということだろうけれども。ただ、そもそも我が国、全般的に高齢化しつつあって、むしろ若齢林が少ないというところにおいて、持続可能性が心配されているところがあるから、やはり主伐というのが非常に重要となってくる。

川中の状況を、いろいろと聞かせていただいた。その中で、やはり一部の原木価格は上がっているものもあるが、依然として製品価格が上がっていないというところから、今後の見通しがなかなか読めないため、厳しいかなというのは聞こえてきたような気がする。

続いて、川上からの発言をいただければと思う。この辺、アンケートで見ると、原木に関しては、販売価格や伐採量、出荷量のいずれもが減少しているというのが、川上側の状況のようである。今後3か月の見通しも、状況は変化しないだろうという、そういうような判断をしているようである。

それでは、具体的にそれぞれからお聞きしたいと思うが、まず、愛知県森林組合連合会の平松さん、川上の状況について教えていただきたいと思うが。

○愛知県森林組合連合会 平松代表理事専務

まず、価格の関係であるが、この3か月ぐらいでは、多少一時的に上がった規格もあったが、全体的には、スギ、ヒノキとも横ばいである。それから、伐採の関係については、秋のピークほどではないが、3月まではある程度の出材が見込まれる状況となっている。造林の補助金を使った事業であるとか、事業系の締め関係から年度末に向けて、ある程度出材があるというような状況である。

あとは、先ほどの話で山主さんにお金がなかなかたくさん返らないため、特に皆伐は進んでいない状況となっている。

○植木座長

なかなか皆伐が進んでいないということは、植林も進んでいないということか。

○愛知県森林組合連合会 平松代表理事専務

そうである。

○植木座長

川上がそういう状況であれば、今後、川中も大変な状況になってくるんじゃないかとは思いますが、岐阜県森林組合連合会の萩巣さん、岐阜県の状況を教えていただきたいが、如何か。

○岐阜県森林組合連合会 萩巣代表理事副会長兼専務

岐阜県森連は、製材用、合板用、チップ、バイオマスを取り扱っている。製材用、合板用については、夏の原木価格が下落したために、木材生産をしようという機運をそがれてしまった。

具体的にいうと、皆伐よりは搬出間伐、搬出間伐よりは切り捨て間伐のほうへ、事業体の業務が流れた傾向があって、冬の集荷にちょっと苦労した。なので、製材用、合板用のお得意様へは、この1月から3月にかけて、何とか供給できるかなという状態が続いている。価格については、夏に比べると、やはり冬場は、スギ、ヒノキともに若干上がった傾向となっている。

今後に関しては、バイオマスも需要に含めると、岐阜県の場合、バイオマス発電の施設が多いため原木が足らなくなる可能性が出てくる。皆伐できるところは切ってしまったところも多いので、どうやって事業地を確保していくかが切実な問題である。

特に、岐阜県の地積調査が18%ぐらいしか進んでおらず、所有者の明確化をどうしていくかというのが大きな課題の一つになっている。現在、行政と連携しながら、県森連の中に所有界の明確化を行う事業部を設け、これからしっかりやっていきたいなというところ。

取扱量については、今年は何とか85%を直送で賄うことができ、令和4年度並みの取扱量は確保できるのではないかなというところである。

○植木座長

一点気になったのが、伐採で、主伐から搬出間伐、搬出間伐よりも切り捨て間伐というような話が出たかと思うが、逆ではなくて、なぜそのような方向に行くのか。

○岐阜県森林組合連合会 萩巣代表理事副会長兼専務

結局、木材価格が安いと、どうしてもそういう傾向になってしまう。山側が事業を続けていかなければならないためである。岐阜県の場合は、森林組合が木材生産の半分を占めるので、うまく自分たちの事業地をやりくりしながら、利益を確保するために、そういう方策も取っているということ。

○植木座長

なるほど、分かった。それでも、何とか、岐阜県森連さんとしては、85%、直送でやりながら、必要量は何とか確保できているという理解でよろしいか。

○岐阜県森林組合連合会 萩巣代表理事副会長兼専務

そう、皆さんの協力のおかげである。

○植木座長

やはり、今、言われたように地積調査は、どこの県も頭を抱えている問題なので、もし岐阜県森連さんと行政との連携の中で、地積調査がうまく行けば伐採が進むよねということになれば、また、お話しいただければと思うが。

○岐阜県森林組合連合会 萩巣代表理事副会長兼専務

今、一生懸命やっているのも、もし成功事例となれば。

○植木座長

よろしくお願ひしたい。それではチップ関係からお聞きしたい。富山県チップ協会の川合さん、チップ業界にとって、今の状況はどうなのか、また、パルプ関係やバイオマス関係等々への供給状況をお願ひしたい。

○富山県チップ協会 川合チップセンター工場長

やはり C 材、D 材については、先ほど大王製紙さんからも話があったが、やはり FIT の関連で間伐未
利用材は、燃料用と製紙用、これが競合して取り合いになっている状況はずっと続いている。

先ほど来、話が出ているが、住宅着工が落ち込んでいるということで、結局、山から A 材が出なけれ
ば、カスケード利用において C 材も出ないということで、やはり需給関係は非常にタイトな状況が今後
も続くんじゃないかなと思っている。

○植木座長

なるほど。外材との関係ではどうか。例えば、チップなどの外国からの輸入製品は。

○富山県チップ協会 川合チップセンター工場長

輸入製品については、今、円安の状況なので、どちらかというところ、国産材チップのほうが、まだ割安
ということで、製紙会社においても、できるだけ国産材を使いたいといった需要はあるが、なかなか供
給のほうを追いついていない。

○植木座長

やはり川上からの供給量がないということか。

○富山県チップ協会 川合チップセンター工場長

そのとおりである。

○植木座長

そこを何とか解消できればということかな。

それから、もう一つ、苗木生産のほうもお尋ねしたいと思う。愛知県林業種苗協同組合の村上さん、
苗木のほうの状況をお願いしたい。

○愛知県林業種苗協同組合 村上専務理事

今、針葉樹のヒノキについては、余り気味である。それに代わって、コナラ等の広葉樹の注文が多い
状況。全体的に見ると、前年を下回る状況になっている。

○植木座長

広葉樹の苗木の取引が多くなってきているという理由は、何か。

○愛知県林業種苗協同組合 村上専務理事

やはり今までのスギ、ヒノキではなくて、広葉樹のいろいろな樹種を植えてやっていこうという方が
増えてきていると思う。

あと、その植栽の条件として、花粉対策苗とか、コナラ等の広葉樹が対象樹種となっていることから、
広葉樹も増えてきているのではないかなと思う。

○植木座長

分かった。それから、少花粉スギの生産については、今、国の政策の下で花粉症対策が言われているが、生産状況、あるいは見通しというのはどうか。

○愛知県林業種苗協同組合 村上専務理事

愛知県が森林・林業技術センターで閉鎖型のハウスを造って、少花粉のスギ、ヒノキ、それから、エリートツリーも増産に向けて取り組んでいる。まだ供給量は十分ではないが、徐々に増えていくと思うので、今後そういった需要に対応できるようにしていきたいと思っている。

○植木座長

なるほど、承知した。

それでは、木材供給側として、森林研究・森林整備機構、森林整備センターの川口さん、如何か。

○森林整備センター中部整備局 川口水源林業務課長

森林整備センターは、年度単位で計画を立て事業を実施している。また、当センターは分収造林契約で事業を実施しており、皆伐等による販売の実施に当たっては、事前に契約相手方と協議のうえ実施しているので、今年度全体の主伐、間伐量は5月の説明内容と、大きな変化はなく、概ね計画どおりとなっている。

○植木座長

順調に材は出されているということで、よろしいか。

○森林整備センター中部整備局 川口水源林業務課長

一部、岐阜県において災害があり少し減っているが、概ね計画どおり行っている。

○植木座長

それでは、一応、川上から川下、流れとして話を伺った。次に、各県からいくつかお聞きしたいと思う。これまでいろいろな形で行政として取り組まれ、各県地域材の活用、それから、地域の環境問題も含めて川上から川下で進められているところ。むしろ川下の部分では、力の入れ具合も大分変わってきているのかなという気がしている。

そういったことも含めて、各県からいくつか伺いたいが、福井県の坪井さん、福井県の林業、林産業の関係、環境問題も含めて、如何か。

○福井県県産材活用課 坪井主任

今、住宅分野が、皆さんの発言どおり厳しいということで、特に県では、民間企業の木造、木質化、木製品の導入に力を入れており、各民間企業の団体に時間をいただき、木材利用促進のセミナーや見学会を開催している。

さらに、県産材を使う企業への導入支援を活用いただくことで、民間企業での木材利用が広がってき

ているところ。

○植木座長

なるほど。それから、富山県の石割さん、よろしくお願ひしたい。

○富山県森林政策課 石割副主幹

今年度の取組として、富山県ウッド・チェンジ協議会という新たな協議会を設立し、2 回ほど会合を開いたところ。目的は、非住宅、中高層建築における木材利用の促進で、今年度は、協議会の方から意見を聞いたり、県内のあらゆる事業者にアンケート調査をして、木材を使わない理由についての情報収集を行った。次年度からは、それらへの対応策についての情報発信をしていきたい。

今回のアンケートで、木は燃えやすい等の意見がたくさん出たので、それらに対する最新の情報等を提供して、木を使いやすい環境づくりを進めていこうと思っている。

○植木座長

アンケートを実施することによって、それを基に何らかの情報発信をするということだが、そういった手法は、富山県で考えたのか。

○富山県森林政策課 石割副主幹

そうである。富山県として独自に行っている。

○植木座長

そろそろ時間が来ているが、これまで発言いただいた中で、いろいろと聞きたいことがあれば質問いただけないか。また、こういう点が言いたいということがあれば挙手いただいて説明していただければと思うが、如何か。

では、中部森林管理局さんお願ひしたい。

○中部森林管理局 井口森林整備部長

中部森林管理局は、木材供給者と行政機関の2つの立場がある。まず、木材供給者の立場からの状況について紹介したい。中部局での原木の販売実績について、昨年と今年の第3 四半期を比較すると、数量は昨年とほぼ同じ水準である。これは、協定取引が主体となっているので、計画的に販売できているということだと考えている。ただし、素材生産請負は、昨年もそうだったが、不調不落の影響があつて、計画量よりは下回っている。

あと、販売単価については、同じく第3 四半期同士で比較すると、スギ、ヒノキは約1割の下落、カラマツについては約2割の下落となっている。これは、ウッドショック前の水準に近づきつつあると捉えており、国有林材も、民有林材を含めた市場での取引きなので、同様になっていると思う。

行政機関の立場の取組としては、配付資料に記載のとおり四半期ごとに供給調整検討委員会を開催して、マーケットで急激な価格変動があつた場合には供給調整の必要性を検討するということになっている。今年度は、これまでのところ、そんなに大きな変動はないので、供給調整は実施していない。

もう一点、今年度から始めた取組として、民有林における適正な流木価格の形成に役立つように、国有林での立木購買の物件情報、例えば、樹種、直径はもとより、品質や地理情報などもホームページで公開をしている。まだ物件数が少ないが、他局のものも含めて参考にいただければ幸いである。

○植木座長

なるほど。民有林の適正な価格というところをにらんだ取組ということ。こういった物件の情報を流すというのは、今回初めての取組なのか。

○中部森林管理局 井口森林整備部長

そうである。いろいろな情報を流すのは今年度から。林野庁本庁の指示により全局で開始した。

○植木座長

それは、径級だとか、長さだとか、品質だとかの情報が入っているということ。

○中部森林管理局 井口森林整備部長

あと、地理情報がある。

○植木座長

地理情報が入っているということか。これは、いろいろと活用してもらえればということだね。

それでは、何か皆さんから発言したいということがあればお受けするが、如何か。それでは、この辺で今回の情報交換会を締めたいと思う。

簡単にまとめさせていただくと、我が国の森林の循環的な経営、また、需要者への木材の安定的な供給に向けて国産材の利用の推進が欠かせない状況になっていると言える。為替の影響だとか、木材需給に関わる世界各地の動向、国内の住宅需要動向の影響が大変不透明な中であって、国産材の活用のチャンスを広げるためには、今後の需給見通しや、それらを踏まえた先進的な取組について参考になる情報を活用することが非常に重要な時期へ来ていると思う。

情報共有の場として、この需給連絡協議会が大いに活用されることを、また、引き続き皆様の協力の下、議論を進めていけたらと思っている。本日は、どうもありがとう。

○植木座長

それでは、一旦、協議会については締めさせていただく。ここで少し時間をいただいて、私から小委員会を設置して新たな取組を、という状況について簡単に触れさせていただきたい。

5月の第1回の協議会の場で提案した小委員会であるが、協議会后に、早速、構成員の皆さんを中心に参画を呼び掛けたところ、業界団体、行政等の有志、18者から手が挙がった。林野庁の「顔の見える木材供給体制構築事業」の採択を受け、9月からこの1月までの短い期間ではあったが、会議3回、現地検討3回を実施して、幅広い議論を展開することができた。

当初、私からは3つのプロジェクトの課題を挙げていた。1つが、主伐、再造林、皆伐推進に向けた山側の課題、それから、2つ目として、大径材の利用、高齢級林分の増加に伴う大径材利用に向けた課

題、3つ目はサプライチェーンマネジメントであり、これを1つ目と2つ目の課題解決に向けて進めていくことを提案したところ。

課題が広範囲にわたり、時間的制約もあることから、まず、流通の核となる価格の問題、それから、大径材利用の1つとして梁桁の流通の可能性、そして、サプライチェーンモデルによる流通の検証の3つに取り組んだところである。

実証の方向性として、まず、大径丸太から製品の生産、これをマーケットへ提供するという実証を通じて、一連の仮定検証を行い、それによって、サプライチェーンマネジメントの可能性を探っていたということが1つ。それから、2つ目の方向性としては、大径材の小割は歩留りが悪くなるということから、できるだけ無垢のまま使うということを基本に置いた。主力商品あつてのサプライチェーンであり、売れるものを開発するために、一般住宅用の部材、三五角の柱を対象とした梁桁をターゲットに進めたところ。今回は、末口30cm上を大径材として定義した。このサイズの丸太からは、製品ニーズのある6寸、7寸、8寸の平角が取れること、さらに原木は、運材コストを抑えるということも考えて50キロ圏内で入手するというところで進めてきた。

実証の内容であるが、まず、原木は愛知県産のスギを直送ルート、それから、岐阜県産のヒノキを市場ルートで手配した。製材は、スギ、ヒノキともに、心去りの二丁取りを基本として行い、乾燥は、高温と中温で実施した。実大強度試験を行って、平角の製品サンプルを作った。丸太の加工、それから、実大強度試験については、現地検討を実施し、議論を重ねた。

実証の結果として3点ほど言えるかなと。流通各分野の価格検証については、原木調達のコスト、製材加工に係るコストの検証を試みたが、現段階では、まだまだ山元へ還元額の試算にまで至っていないというのが現状。これは、さらに検討を深めていきたいと思っている。それから、直送で一定の太さの丸太をタイムリーに調達するということの困難性を実感したところ。

ただし、製材実証では、大径材、特に、スギを無駄なく使うために、心去りの二丁取りの有効性が検証できたと思っている。今後、製材サンプルについては、プレカットを通じて、川下の建築分野へ提供して評価を受ける予定をしている。

以上が、今回の実証で進めてきたところ。時間が足りなかったため、当初の目標どおりにはなかなか行かなかったが、サプライチェーンのモデルらしきものも徐々に見えてきたことなど、それなりの成果が出たかなと思っている。

今回は第1弾ということで、今後も林野庁の事業に応募するなどし、第2弾、第3弾と積み重ねることによって、中部圏の木材利用、とりわけ大径材利用、それから、山側への還元と再生林という課題を、うまくつなげていければいいかなと思っている。参加された業界、団体、行政の皆様に、心から感謝申し上げます。簡単だが、報告は以上とさせていただきます。

一応、本日予定した議題は全て終了となる、出席者の皆様の協力に感謝申し上げます、進行を事務局にお返しする。

以上